

化粧絵の研究

Study of 'Kessho-e' (cosmetic pictures)

陶 智 子

SUE Tomoko

1 江戸時代の化粧品広告における美艷仙女香

江戸時代に化粧品の宣伝広告が行われていたというと、意外に思われるかもしれない。勿論、現代の宣伝広告とは異なり、その方法は印刷物に商品の名称や包み紙の図、また店先の風景が載るといったものが大半である。

また、芝居の口上の中で商品の宣伝が行われたことも知られている。宣伝広告された商品の中でも、現代の化粧品広告の源泉とも考えられる要素を備えた広告を行ったのが、白粉と髪染め剤を商った坂本氏である。

どこにでも面を出す仙女香

と川柳にも詠まれた美艷仙女香は、江戸時代後期のあらゆる種類の印刷物にその名前を見出すことができる。

美艷仙女香とは坂本氏が販売した白粉の名称である。

あらゆる印刷物にその名が載ると書いたが、最も多くみられるのは浮

世絵である。版本については、証左はこれからといった段階であり、調査を進めることができれば、異なる見解を得る可能性もある。

美艷仙女香の広告が載った浮世絵の初出が文政六年（一八二三）、歌川国貞の「今風化粧鏡」のシリーズであることは、拙著『江戸美人の化粧術』（講談社メチエ選書、二〇〇五年刊）で述べた（注1）。

美艷仙女香の包み紙が浮世絵の中に描かれる、もしくは美艷仙女香の文字が浮世絵の中に見られる、というように、広告は巧みである。

どのような掲載方法があったかを分類すると、次のように考えることができる。

- ①美艷仙女香の包み紙が浮世絵の中に何気なく置かれている。
- ②あきらかに美艷仙女香の宣伝用に作られたタイアップと考えられる広告の浮世絵。

- ③役者が美艷仙女香を宣伝する形式の浮世絵。

- ④役者や、歌舞伎の演目を描いた浮世絵の中で、舞台装置や小道具などとして美艷仙女香を描く。または役者に関する詞書に宣伝広告が載る浮世絵。

- ⑤東海道五十三次シリーズなど風景を描いた浮世絵に風景の一部として美艷仙女香が描かれる。

- ⑥相撲絵に仙女香の文字が書き入れられる。

化粧絵は美人画に限るなどということはないのである。予想もしないような浮世絵の片隅に「仙女香」の文字を見出すこともある。現在のと

ころ武者絵には仙女香の文字が刷られたものを知らないが、それもない
 とはい切れないのである。

このように浮世絵の中に美艷仙女香が描かれるということ以外にも、
 先にも述べたとおり、版本の中や奥書に広告文が載る場合、版本の絵の
 中に美艷仙女香の文字や包み紙、看板などが描かれるなど、美艷仙女香
 はほんとうにどこにでもよく面を出している。

2 美艷仙女香の描かれた化粧絵

『江戸美人の化粧術』の中で、化粧に関連する事項が描かれた浮世絵を
 「化粧絵」とした(注2)。化粧絵は、その大半が美人画の範疇であり、
 役者絵にも多くそれと分類できるものが存在する。

現在は、美艷仙女香に関する化粧絵や版本、また摺り物などの収集及
 び分類を進めている段階である。

そこで本稿では、二〇〇六年から二〇〇七年にかけて収集した美艷仙
 女香に関連する化粧絵について述べたい。

以下、1の分類①から⑥にあてはめて説明を行う。

①美艷仙女香の包み紙が浮世絵の中に何気なく置かれている。(図一)

図五

美艷仙女香が描かれた化粧絵の中で、この分類に属するものが最も多
 く存在するのではないかと考えられる。以下、図一から図五について述
 べる。

図一は「風流投扇興 みをつくし」と題されている歌川国貞による化
 粧絵である。鏡台の前で片肌脱ぎになり髪を結っている女が描かれる。
 こま絵は、投扇興である。これは、台の上に蝶々の的を置き、離れたと
 ころから扇を投げて的を倒す遊びである。倒れた的と扇の位置によつて
 『源氏物語』の巻の名で呼ばれ、点数がつく。図中の台に扇が乗った状態
 的が倒れると「みをつくし」と呼ばれたのであろう。扇には源氏香の
 印が模様となっている。

鏡台には、糠袋が掛けられ、鏡の前には白粉溶きの容器が置かれてい
 る。白粉を塗る刷毛や簪も置かれている。鏡台の奥の鉢植えは撫子の花
 であろうか。

手前の鏡の横に美艷仙女香の包み紙が「何気なく」といった風情で置
 かれている。この包み紙は、効能書きが刷られたタイプである。類似の
 化粧絵を数点所持している。

図二は「吉原時計 酉ノ刻」と題されている。図一と同じく国貞画で
 ある。豪華な衣裳を纏い、髪を大振りに結い上げた花魁が、蠟燭を立て
 た鏡台の前で、ぼたん刷毛を用いて頬に白粉を塗っている。鏡の前には
 蓋を開けた白粉溶きが置かれている。この化粧絵のように、鏡台に蠟燭
 を立てた図は他にも数点所持することから、実際に暗くなるとこのよう
 なことが行われていたと考えられる。

こま絵には、三味線を持って仕事へ行く花魁と、鈴を鳴らす男衆が描
 かれている。

手前には美艷仙女香の包み紙が置かれている。包み紙は図一と同じく
 効能書きの紙である。

美しい花魁が、美艷仙女香を今まさに塗っている姿を見て、この化粧絵を手にした人は、美艷仙女香を用いることにより、美しさが倍増すると思ったのかもしれない。

図三は「今様七小町 関寺小町」と題された溪斎英泉の化粧絵である。「七小町」とあることから七枚ものであったと考えられる。江戸時代の浮世絵で「七小町」と題にあるものは、七枚の揃いものであることが多々ある。

鏡台の前で芸者と考えられる女が首筋を拭っている。白粉ののりが悪いのを押さえているのか、つけすぎた白粉を拭い取っているのかは不明である。少し引き出された鏡台の引き出しには、美艷仙女香の包み紙の部分が見える。「美艷仙女香」の部分の紙が青い。

鏡の前には白粉溶きが、鏡の後ろには、房楊枝（現代の歯ブラシ）が置かれている。鏡台の下部分の引き出しは鍵がかかるようになっていく。図二の花魁の使っている鏡台とは違うのだが、よく見ないとその違いを見逃してしまう。江戸時代の庶民向けの鏡台は、日本人の多くが利き手が右であったことから、右側に引き出しが付いている。

図四は三枚続きの一枚ではないかと考えられる。題は不明。作者は国貞である。姿見の前で髪を結っている女が描かれている。

姿見の足下に少し不自然な角度で美艷仙女香の包み紙が置かれている。美艷仙女香の文字の部分の紙が青い紙である。

手前には髪を結うための櫛や元結いを切る握り鋏、鬢付け油の壺などが描かれている。髪を結うための細々としたものは、このような紙に包まれて片付けられた。

図五は「浮世すかた」と題された英泉の作の化粧絵である。右上が破れにより欠損し穴も開き、紙がやけて退色もすすんでおり皺だらけということで、状態はたいへんに悪い。

が、資料としてはたいへんに興味深いものである。

女は手に仙女香の包み紙を持っている。青い紙の文字は「仙女香」とだけあり、大雑把な感じすら与える。その包みの後ろには「おしろいの花やうき世の造り物」と書かれている。白粉を塗って、すなわち化粧をして花のように美しくなることは所詮浮き世のつくりものに過ぎないというのだから辛辣である。どう解釈をしたらいいものかと考えさせられる。美艷仙女香を薦めているのやら、いないのやら、定かではない。化粧をするということをとどのように考えるかということのひとつの答えを見せられた感がある。

②あきらかに宣伝用に作られたもの。（図六、七）

あきらかに宣伝用に作られた化粧絵は、現代ならばさしずめタイアップ広告のようなものである。

図六は「美艷仙女香といふ」という英泉の作の美艷仙女香宣伝用の化粧絵としては最も有名なシリーズの一枚である。大首で描かれている女は青眉でお歯黒という姿である。下唇は、紅を濃く塗って緑色に蛍光発色させた笹紅と呼ばれる化粧法である。詞書に「美艷仙女香といふ坂本氏のせいする名高きおしろいに美人をよせて」と書かれているだけで、白粉の包み紙も描かれてはいない。

こま絵にも、女の手元にも美艷仙女香の包み紙が描かれているわけで

はない。女は煙管を左手に持ち、頬杖について手紙を読んでいる。真剣に読んでいるというよりは、内容を品定めしているようでもある。

図七は「今様七小町 雨乞小町」という題からわかるとおり、図九「今様七小町 関寺小町」と同じシリーズの一枚である。実は、図九も宣伝用に作られた化粧絵に分類すべきであろうと考えている。いずれ他の五枚を見ることが叶い、すべてに美艷仙女香が描かれていればそれはあきらかと考えることができよう。現段階では、この化粧絵の分類も含め不確定である。

「今様七小町 雨乞小町」は一見美艷仙女香とは何の関わりもなさそうに思える。美艷仙女香の包み紙が描かれているわけでもなく、女が化粧をしているのでもなく、詞書に美艷仙女香の文字もない。が、よく見ると意外な場所に仙女香の文字を発見する。

この化粧絵の特筆すべきところは、「坂本 仙女香」の文字が女の足下に置かれた傘に書かれていることである。他にこのような例を見たことがない。

幕末から明治時代にかけて、坂本氏が白粉の販売からコウモリ傘の販売に転ずることを考えると、実に興味深い一枚であるといえよう。

女は手をかざして雨が降らないかと空を眺めているようである。女の小袖の柄が桜であることも、この女が小町の見立てであることを想起させるに十分である。また、帯が蝙蝠の柄であることも一興である。

この化粧絵に関しては購入後に北海道新聞にその詳細な解説を寄稿している(注3)。

③役者が美艷仙女香を宣伝する形式の浮世絵。

江戸時代多くの人気役者が化粧店を構えたことは有名である。人気役者が化粧品の宣伝をしたという事実は、現代において人気女優やタレントが化粧品のコマーシャルに出演するのとなんらかわりあるまい。

図八は人気の高い女形の役者の岩井兼三郎が、揚巻に扮して団扇におさまっている。その下には、驚くほどの大きさに美艷仙女香の包み紙が描かれている。これは宣伝以外のなものでもあるまい。

この団扇絵のシリーズは、東京都立中央図書館に立役の役者を描いたものが二枚所蔵されていることが知られている(注4)。図柄はまったく同様であるが、描かれる役者が異なっている。また、東京都立中央図書館所蔵の二枚には、「役者当世団扇」と書かれている点と、作者が「国貞画」となっている点が架蔵のものとは異なる。架蔵のものは「豊國画」である。国貞と豊國は同じ絵師であるが、豊國は後の名である。正確には二代豊國である。

実はこの「あげ巻」には対であったのではないかと考えられる化粧絵がある。「助六」である。

新藤茂氏が「二代豊國初期役者大首絵」で、次のように述べている(注5)。

二、七代目市川団十郎の「助六」について

文政十一年(一八二八)三月、市村座における『助六所縁江戸桜』に取材した、七代目団十郎の「助六」を描いた二代豊國の役者大首絵(図版7)である。さらにそれと同じ版で、「団十郎」の文字の横に「改海老

蔵」と付け加えた後版（図版8）が存在する。明らかに後版は、天保三年（一八三二）三月、市村座において、七代目団十郎が前名の「海老蔵」に戻って、息子の海老蔵に「八代目団十郎」を襲名させた際に、『助六所縁江戸桜』の「助六」を勤めたときのものである。「改海老蔵」の文字を入れるために「豊国画」落款を削り取って、反対側に稚拙な文字で彫り直した「豊国画」落款を摺り込んでいる。

この文章によると、「助六」は二度刷られていることがわかる。架蔵の「あげ巻」は「豊国画」の文字から文政十一年に刷られたものではないかと考えられる。

見る者に強い印象を与えるこれらの化粧絵は、人気役者の芝居の宣伝と、化粧品の宣伝を同時に行っているのである。

3 おわりに

美艷仙女香に関する化粧絵がどれほどの数存在するのかは皆目見当もつかない。が、これまでの調査によつて、分類の方法については、本稿で示した方法でよいのではないかと考えに至っている。

しかし、これらの化粧絵については、まだまだわからないことが多く存在することも事実である。諸外国も含め各地の博物館に所蔵されているもの、また個人所蔵のもの、過去の古書店の目録など、これからも地道に調査収集に励みたいと考えている。

謝辞

本研究の一部は、富山第一銀行奨学財団の研究助成によるものであることを記し、心より御礼申し上げる。

注1 陶智子『江戸美人の化粧術』講談社メチエ選書、二〇〇五年刊、一四二頁

注2 陶智子『江戸美人の化粧術』講談社メチエ選書、二〇〇五年刊、六十六頁

注3 陶智子「深遠な化粧絵の世界」北海道新聞、二〇〇六年三月七日夕刊（図九）

注4 陶智子『江戸美人の化粧術』講談社メチエ選書、二〇〇五年刊、一五一頁

注5 新藤茂「二代豊国初期役者大首絵」『浮世絵芸術』国際浮世絵学会会誌、二〇〇七年、No.154、特集豊国、六十六頁～七十二頁（平成19年9月25日受付、平成19年10月10日受理）

図一 風流投扇興 みをつくし



図三 今様七小町 関寺小町



図二 吉原時計 西ノ刻



図四 無題 (髪を結う図)





図五 浮世すかた



図六 美艷仙女香といふ



図七 今様七小町 雨乞小町



図八 あげ巻 岩井糸三郎



陶 智子

昨年十一月、「江戸美人の化粧術」(講談社選書メチエ)という本を上梓した。この本は、江戸時代の美人について考察し、化粧の理論的側面、その行為について述べ、さらに化粧品の宣伝合戦についても書き連ねたというものである。十数年つらつと考えてきたことだ。その間に収集した化粧絵(化粧に関する浮世絵のこと)満載で、ばらばらめくむけで楽しめず、江戸時代の美人満載である。さて、今日は、本を書いた後に入手した化粧絵について述べたい。

実はこの原稿の依頼を受けた数日後に神田神保町で出会った、即入手した漢英辞書の一枚は、もつ少しはやく見つけていたら絶対に本に載せたかった逸品である。資料としてのすごい情報量だ。が、写真をとったが、いかにわかっており、状態はすこぶる悪い。ぼろぼろのぼろぼろである。それこそ雨で濡れたかと思ふほどだ。だから、美術的な価値はない。私は浮世絵を鑑み入れて飾る趣味はないから、描かれている顔の面白さや、ちょっとやそっとでは語り尽くせないその世界こそが重要だ。

すえ・ともこ 富山短大助教授。1960年、札幌生まれ。日本女子大卒、図書館情報大学院情報学系研究科博士後期課程修了。著書に「江戸の化粧」(新泉社)、「不美人論」(平凡社新書)、「加賀百万石の味文化」(集英社新書)など。

深遠な化粧絵の世界

今様七小町・雨乞小町

「白粉」と「傘」に関連性

早速説明。一枚の紙にふたりの女が描かれている。ひとりは大きく、もうひとりはいさ。左上の四角の部分に「今様七小町」とある。右の部分は「雨乞小町」とある。平安時代の歌人であり、絶世の美女。しかし、この化粧絵の主人がなにを言っているのか。

絵の題は「今様七小町・雨乞小町」である。そこで、小町と雨乞について少し触れたい。平安時代のある年のこと、日照りが続き、朝廷も祈禱をいらい。と手を尽くしてはみた。ところが、一向に雨が降らず、この上は和歌の詠をもつて賜物さまを感嘆させ奉るはあまるまい。というところになった。そこで、その和歌の詠者として当時第一の歌人として小野小町が召された。衣装を纏っているはず。

また、彼女の帯の柄も面白い。蜘蛛が描かれている。以前、この博物館で、蜘蛛の柄のきものを着た女の絵の解説に、「蜘蛛は薄幸のあかし」などと書かれていた。私がかつては、蜘蛛は幸福の象徴である。これは大陸の文化の伝播なのだ。「蜘蛛」の文字の音が「福」と通じるから、ここから本題。雨乞小町の見立ての女の傍らに傘が描かれている。雨乞の絵であるから、傘が描かれることに疑問の余地はない。問題は、その傘に書かれた文字である。「坂本仙女香」とある。これは、江戸時代の白粉の宣伝なのである。「美姫仙女香」という白粉は、江戸時代多くの浮世絵、版本にその宣伝が登場する。小野小町に見立てられた美女も白粉は仙

女香を使っていたということだ。いや、伝えたことには「仙女香を使っているから美人なのだ」かもしれない。どちらでもいい。この化粧絵、さながら今の化粧品のポスターのようではないか。ね、面白いでしょ。面白くこのため押しがもうひとつ。江戸時代に白粉「美姫仙女香」で一世を風靡した坂本は、幕末明治と蜘蛛傘を贈ったことになる。この絵の傘には通、西洋から伝来した傘だ。「蜘蛛傘」の「蜘蛛」は「かはり(蜘蛛)の」同じく、その骨のあり様が蜘蛛のまたかたという名称である。とにかく、白粉屋は洋傘店に商いをかえるのだ。この化粧絵が描かれた時代では、坂本はまだ白粉メーカーである。が、蜘蛛の柄の帯といい、美人の横の和傘といい、何かを暗示しているように思えるのは、考えすぎというものであろうか。

とにかく、かくのごとく一枚の化粧絵の世界は深遠なのである。



図九 北海道新聞